

今年度を振り返りたいと思います。1学期末、2学期末ともに、皆さんには、本校の校訓「文武心」の実践について話をしてきました。松山北高校生として、質の高い文武両道を目指して勉強、部活動、ボランティアなどの諸活動を実践することは、皆さんにとっては、日常の学校生活の一部であってほしいと願っています。さらに、本校の生徒であれば、「心」の実践についても、質の高い行動を期待しています。

今年度、皆さんには、心が洗われるような清々しい行動の一部を紹介しました。例えば、真夏の部活動では、座って休んでいたにもかかわらず、その場ですぐに立ってしてくれた気持ちのいい挨拶、すれ違う時に、それとなく立ち止まってしてくれた挨拶や会釈、私の方へ正対しての挨拶などに加えて、朝の登校時から正面玄関あたりで、気持ちのいい挨拶の声も響いています。2学期の終わりには、自転車置場で、強風のために倒れた自転車を起こし、整理してくれた話もしました。

スポーツの話題においては、テレビなどの画像を通して清々しく、日本人として誇りに思えるシーンとして、昨シーズン、メジャーリーガーで大活躍した大谷翔平選手が、プレーの合間に目の前のゴミを拾っている行動や、国際大会などが開催されたサッカースタジアムで日本人サポーターが試合後に、スタンドのゴミを拾って会場を後にする光景が世界中から称賛を浴びていることを紹介しました。

その他、令和3年の春に53歳の若さで亡くなりましたが、「平成の三四郎」と称された、バルセロナオリンピック金メダリスト古賀稔彦氏は、柔道の自分の道場において、「当たり前前の事を当たり前前のように出来る事」つまり、あいさつ、感謝、席を譲るなどの行動が普通にできるよう、子供たちに指導されていたとのこと。特に、講演などでは、「目の前のゴミをつかめない者は、自分の夢をつかめない」と強く語られていました。

また、本校の皆さんは、様々なボランティア活動にも積極的に取り組んでいます。今後も時間を有効に活用し、先生方の紹介などの機会を通じて、興味、関心をもってボランティア活動に励み、社会貢献につながる体験を積み重ねていきましょう。これらの体験を通じて「私がします」という奉仕の心が確実に培われることを願っています。

皆さんが挨拶や清掃などを、奉仕の心をもって普通に実行できるように成長することは、論語の「徳（とく）は孤（こ）ならず、必ず鄰（となり）有り」という教えが、将来、実現できることにつながると信じています。「徳」というのは、毎朝明るく誰にでも挨拶ができる人、誰も見ていないところで落ちているゴミを拾う人、一日に何度でも、些細なことに対しても「ありがとう」と感謝を伝えられる人など、日常生活において、誰でも少し意識をすればできる、普通の行動と理解してください。皆さんが、このような行動ができる大人に成長できれば、周りには素晴らしい仲間が現れて、あなたを助けたり、支えたりしてくれるという意味です。小さなことから実行し、自分で「心」を磨きながら、また一つ学年が進み、さらに成長することを心から願っています。